

大谷光瑞

杉森久英

大谷光瑞

杉森久英



中央公論社

大谷光瑞

©一九七五 検印廃止

昭和五十年二月一日初版印刷
昭和五十年二月十日初版発行

著 者 杉 森 久 英

発行者 高 梨 茂

印刷所 奥村印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六)五九二一(代)

振替 東京三四

大
谷
光
瑞

ひとつの生命が生まれた。

この小さな生き物は、同じ時間に、同じ国土のあらゆる地方で生まれた、ほかの無数の赤児と同じように、しわくちゃの、年寄りじみた顔をしかめて、泣きさけんでいた。

見たところ、彼はほかの赤児とすこしもかわっていない。空腹になると泣き、尿で尻がよごれると泣く。泣くことによってしか、彼は自分を主張することができない。あらゆる動物の仔とおなじように。

しかし、この小さな生命の誕生は、多くの人々に活気を与えた。長い廊下を、侍女やはしためが、いそがしそうに走りあるき、あちこちの部屋から笑い声が洩れる。

この赤児は、ただの赤児ではない。浄土真宗二十二代の法主として、将来法域に独裁的な権力をふるうことを約束

された人である。もちろん、赤児自身は自分に課せられたそういう運命を知らない。

赤児は峻磨と名づけられた。明治九年の暮のことである。生まれて半年もたたぬ、五月ごろのある日、急に皇太后の宮が西本願寺へ行啓になった。のちに英照皇太后と呼ばれた方で、孝明天皇の皇后である。宮はかねてからこの寺の百華園が名園と聞いていたので、一見したいというのである。にわかに行啓なので、一同あわてたが、宮は御機嫌うるわしく、法主、夫人に謁見を賜わった。

赤児の峻磨も、乳母に抱かれて、お目通りへ出た。宮は、「おお、かわいいお子」

と目をほそくして、お膝の上へ抱き取ると、そっと指を出された。赤児はそれをしっかりとぎって、口へ持っていくこうとする。宮は赤児のするまにさせながら、

「まあ、人見知りしないお子よ」

とお笑いになった。

そのうちに、赤児の着物の裾から、一筋の水がほとばしって、宮のお膝の上に流れた。

「これは、とんだことを……」

一同あわてふためいたが、宮は、「よろしいのよ」

と、にこにこしておられるばかりである。

お帰りがけに、

紫鳴海紋り

一疋

毛植の兎

一

毛植の狗

一

金彩色大狗

一

がらがら

一

彩色球

一

を、おみやげとして賜わった。ついでにいえば、このとき赤児の父の法主光尊に賜わった品は、

白羽二重

三疋

四君子彫銀大水入

一

銀鍍金文鎮

一対

であった。

峻麿は成人しても、

「皇太后さまにしいをおかけした人は、日本国広しといえ

どもあなただけでしょう」

と、よくいわれた。

二歳……

三歳……

彼はまだ自分が何者であるかを知らない。

彼ひとりのために、乳母、昵近（近侍）、侍女といった、大ぜいの男女がひかえていて、彼が咳ひとつしても、くさめひとつしても、ちょっと身じろぎしただけでも、

「もしやお風邪では？」

「お熱は？」

と心配してくれるが、それは自分だけが受ける特別の待遇なのだとも思わない。そもそも彼はまだあまりに幼くて、他と自分を比較することを知らない。自分に見えるものが世界の全部なのであり、それ以外に、べつの生き方をしてる人間があらうなど、考えられもしないのだから。

本願寺の境域は、六条堀川から七条へかけてひろがり、高い土塀でかこまれているが、明治十年代のこのあたりは京都の町はずれで、一步外へ出ると、竹藪や畑地がいたりまじり、庭先を狐が通りすぎることも珍しくなく、夜は森閑としたなかに梟が鳴いた。

明治十四年、彼は六歳である。

ある日、見馴れぬ大人が来て、うやうやしく一礼し、

「駒沢格理と申しまする」

と名乗ると、墨をすり、筆を持たせて、字の書き方を教えた。大人のまねをするのが珍しくて、やってみたが、まもなくあきて、筆を置こうとしても、駒沢は許さない。態

度はどこまでも鄭重だが、底に毅然としたものがあつて、みだりに幼君のわがままを通させまいという氣構えである。彼は生まれてはじめて、自分の意志をさえざるもののあることを知った。

ある日、乳母の、多くの姿が見えなくなつた。いくら呼んでも、出て来ない。生まれてから今まで、寝るにも起きるにも、食事の世話から用便の始末まで、とく以外の者にやらせたことがない。

「とくはどうした」

と聞くと、近侍が氣の毒そうに、

「里へ帰りました」

「呼んで来い」

「とくはもう参りませぬ。そこもと様はもはや赤子ではいらつしゃいませぬ。これからは手前どもがお世話いたします」

彼は自分がようやく成長のべつの段階に足を踏み入れつつあることを知る。

彼はこれまでの子供部屋から出て、新しく建てられた自分だけの居室に移される。彼は女どもの柔弱な世界から自分を引離して、将来宗門の統領として立つ人物にふさわしい教育をほどこそうという大人たちの意図が、だんだん呑

み込めてくる。

新しく、教育係として信楽哲乘と田宮友令が任命される。信楽は『略書』『孝経』の素読を教え、田宮は草書の書法を教えた。

明治十六年、八歳。

彼は山科別院内の学問所に移り、引続き信楽哲乘から『正信偈』『孟子』の講義を聞いたが、まもなく信楽が病死したので、北島僧梁がそのあとをついだ。

山科での修学は毎日午前七、八時ころはじまり、午後四時ないし五時ころ終つた。日曜の午前は習字にあてられた。彼のふだんの夜具は、表に銘仙を用いてあるけれど、裏は木綿で、食事も、野菜と魚を主とした一汁一菜で、ほかに滋養と称して、毎朝焼餅一個を添え、なお米をたいいたときの重湯に卵を一個入れたものを供した。

冬になると、毎土曜の夜風呂をたてる定めで、近侍も入浴したのち、べつに取っておいた湯で、大釜にいっぱいの薩摩芋をふかし、主従そろつてたべるのがたのしみであった。一宗の門主の後継者たるべき人としては簡素にすぎようだが、そのころの日本人の日常生活は、上流も下層もおしなべて、そのようなものであつた。

明治十八年十二月、十歳である。彼は得度の式をあげ、

鏡如光瑞と名づけられた。同時に、山科の学問所を引揚げ、本願寺に帰り住むことになった。

光瑞の父明如上人は、人よりすぐれて背が高く、面長な顔に、目鼻がくっきりして、口もとがしまり、威厳と気品を兼ねそなえた人で、五世尾上菊五郎とどちらかといわれるほどの美男子だった。彼は若年で本願寺の法主になったが、たまたま維新直後の変動に際会して、宗門の存亡にかかわるような危機を乗り切るため、苦勞が絶えなかった。

もともと西本願寺は朝廷と親しく、東本願寺は徳川家と近かった（両者ともにただ本願寺と称しているが、外部からは本派を西、大谷派を東と呼んで、区別している）。これは江戸時代初期、東西が分離するとき、家康が東に好意を持ったからといわれているが、それが尾をひいて、幕末になると、西本願寺は勤王諸藩とつながりが深くなり、幕府から疑惑の目で見られることが多くなった。

ふしぎな寺男がいた。東国なまりがあったが、どの生まれともわからず、同輩ともほとんどつきあわなかった。ひとり部屋にとじこもって、コヨリで犬や馬の形をこしらえるのが趣味であった。ある日、急に暇を取ったので、気のきいた者にあとをつけさせると、京都を出はずれたとこ

ろで、待たせてあった馬に乗り、武士の姿になって、槍を立てて去った。関東の隠密で、コヨリは密書ではなかったかと噂しあった。

西本願寺と長州の毛利家との関係は、戦国時代からである。織田信長が石山本願寺を攻めたとき、毛利は瀬戸内海から糧食、彈薬を運び、本願寺の裏口へ陸揚げして助けた。それ以来、西本願寺は毛利家とつきあっているから、江戸時代、毛利が幕府にいらまれている間じゅう、西本願寺は蔭で毛利を助けた。

元治元年、蛤御門の変に、長州藩が幕軍に敗れたとき、長兵十数名、西本願寺へ逃げこんだ。西本願寺では彼等をおくまい、頭をそらせたり、僧服を着せたりして、落ちのびさせた。その中には、のちに明治政府の中樞となった山田顕義や品川弥二郎もまじっていた。

西本願寺が長州兵を庇護していることに勘づいた会津藩は、二、三日後の夜、軍兵多数をさし向けて、厳重に搜索させた。当日は雨で、会津兵はみな蓑笠をつけ、長槍の穂先に大蠟燭をさして、物置から台所の隅々まで調べてあるいた。長兵の大部分は逃げ去ったあとで、二名だけ残っていたが、発見されずにすんだ。

翌年、会津藩は新選組の屯所を西本願寺の中に置くこと

を強要して来た。新選組は勤王の志士を取締まるために設けられたもので、京都守護職である会津藩主松平容保の支配に属していたが、これはあきらかに、いやがらせであった。西本願寺は拒否しようとしたが、許されず、やむをえず本堂の北の集会所を提供した。

新選組の隊士たちは自分が嫌われていることを知っていて、法主の御堂出仕の喚鐘を合図に、わざと鉄砲の練習をやったりした。時の法主広如が鉄砲の音を嫌って、身ぶるいするのが、おもしろくてたまらぬのである。

月のいい夜ふけに、身にしむような美声の詩吟が聞こえてくることもあれば、人の泣きさけぶ声が洩れて来ることもあった。

隊士の中には、そのまま仏道に帰依して、新選組が引揚げることもなくても西本願寺に留まり、一生鐘つき男として奉仕した者もあった。

明治天皇が即位式をあげるとき、その費用の三千両の出所がなかったのも、西本願寺で用立ててもらえないかという内談があった。とても急にはと辞退したが、しばらくして、千両は西国の某大藩で都合してくれることになったが、残りの二千両をせひと、かさねて申し込まれた。

西本願寺では、これを自分ひとりで出すより、東本願寺

と千両ずつ分担したらどうかと考えた。というのは、西は朝廷と親しく、東は徳川と結んでいるということが、世間のうわさになっている。この際二千両を西だけで出せば、西はさらに朝廷に近くなり、東は遠ざかることとなり、将来ますます東西の不和を深くする原因とならないとも限らない。この機会に同等で勤王の誠を表明したほうがよからうということで、東に申し入れ、千両ずつ出した。

浄土真宗は無智文盲の一般庶民の信仰に根をおろしているもので、その信者の範囲は広く、深く、したがって、本願寺の財政的基礎も固くて「国君の富」に匹敵するといわれた。幕末のころは、大分窮乏していたが、それでも朝廷からたえず援助を求められ、求められれば可能なかぎりはこれに応えるという関係であった。明治、大正のころ、西本願寺の一年間の予算は京都市のそれを越えていた。もちろんこれは、全国に散在する一万の末寺を通じて、七百万の善男善女から集められたものであった。

明治維新によって朝廷が政権をとったことは、西本願寺を背後から支える勢力が強化したことを意味するもので、教団にとってよるこぶきことのように見えたが、思いがけぬ障碍が生じた。それは排仏棄釈の運動である。明治維新の運動は、外来思想を排して民族固有の信仰に帰ること

を標榜していたが、その槍玉にあがったのは、仏教であった。明治四年、政府は大教院を開設して、増上寺をこれにあて、本尊を撤去させ、祭壇をもうけて、法衣の僧侶に玉串をささげさせた。僧侶が仏法弘布のため法談をすることも厳禁で、敬神愛國、皇室尊崇の趣旨をのべることだけ許されたが、それが実際におこなわれているかどうかを見届けるため、法主の地方巡錫のとき、警官が臨監し、賽銭を投げる者があると逮捕した。名目は皇國思想の振起だが、実は永年にわたって幕府から圧迫され、虐待されて来た神道家の報復行為だったと考えていい。

こういう状態に対して、真宗諸派は大いに憤慨して、数年の反対運動のち、大教院から離脱することに成功したが、その際先頭に立ったのは明如だった。彼はこのためにたびたび東京へ出かけ、政府の大官その他各方面に陳情してあるいたので、疲労のため、体重が減り、顔色憔悴するほどだった。

このとき明如の大官訪問を、単なる社交癖ないし物好きからのように考えて、諫言する老輩もあったが、それは彼の真意を知らないものであった。本願寺は親鸞以来、庶民の信仰を基礎にしているといひながら、その財力と権力をもって、貴族の地位を確保し、朝廷ならびに堂上家と深く

つながり、維新のときは、長州藩と互いに提携しているし、藩主毛利侯とも懇親の間柄であり、政府の中樞を占める長州出身の大官とも固く結ばれている。いま世間の風潮の表面の変化によって、成り上りの神道家が勢力を占め、仏教を窮地におとしめようとしているが、これらの縁故をたどって、反撃を加え、失われた権利を奪い返そうというのが、彼の目算であった。そしてそれは成功した。

もっとも、明如は単純な保守派ではなかった。明治四年、岩倉具視が政府の使節として欧米へ派遣されることになったとき、明如にも同行して、世界の情勢を視察したらどうかとすすめられた。明如は大いに乗り気になったが、ちょうど門主広如が遷化して、新しくその地位を継いだため、内外ともに多事で、自身では出かけられず、代理として連枝の梅上沢融を派遣し、その補佐として島地黙雷、赤松連城、光田為然、堀川教阿らを随行させた。このとき執行部の幹部連は黙雷、連城らの渡欧をよるこぼず、旅費の支出をしづつたので、明如は苦心して、他から調達しなければならなかった。

黙雷はヨーロッパ各国を回ったのち、トルコ、エジプトを歩き、イエルサレムを訪い、ボンベイからインド内地に入り、仏跡を礼拝して帰国したが、これは日本人僧侶とし

てヨーロッパを訪い、仏跡をめぐった者の最初であった。

赤松連城、堀川教阿は英国に留学し、光田為然はドイツに留学したが、為然が病に倒れたので、二年ばかりで帰国した。彼等は洋行中に髪をのばし、髭をたくわえ、洋服着用という、そのころの僧侶には珍しい姿で日本へ上陸したが、明如は彼等がキリスト教の現地で見聞して来た新知識を活用して、教団の改革に資した。大教院の廃止、神仏分離のとき、明如の指示に従って、第一線で活躍したのも、彼等であった。

世間の風潮も欧化の方へ向って、維新の元勳井上馨^{かおる}などは僧侶に洋服を着用させようという意見だったし、本願寺内部でも、家令以下、礼服には燕尾服にシルクハットを用いることになった。しかし、一人一人がこれをこしらえるとなると、費用が大変なので、寺のほうで一括してこしらえて、必要のとき貸し与えた。

京都市内でも、すべてが洋風化して、京都大阪間に鉄道がはじめて敷かれた数年間、汽車の汽鐘手や技師としてやとわれていた白人のための官舎が三条油小路あたりに立ちならんでいたが、そのあたりをうろちして、白人の日常生活を見学しようとする者が絶えなかった。稻荷祭の神幸行列や祇園会の山鉾巡幸^{やまぼこ}に参加する町役総代もみな燕尾服、

シルクハットという姿だった。

大教校（いまの竜谷大学）の二階建て校舎が建てられたのは、明治十年である。木造ベニキ塗り、アーチ型の軒飾りとバルコニーの列柱が異国情緒をそそったが、門扉、鉄柵、窓枠、ドアの引手など、すべて日本では手に入らないので、ロンドンへ直接注文した。この建築は今日もそのまま残っている。

本山で洋風の宴会をひらく必要のため、銀のナイフ、フォーク、洋皿などの高級品をロンドンへ注文したが、そういうとき門主の相談に乗ったのは、島地黙雷、赤松連城など洋行帰りの青年僧たちであった。

京都で最初に馬車を買ったのも西本願寺だった。ほかにはないので、東本願寺や府庁、御所などからよく借りに来た。皇族や勅使が京都へ来られたとき、送り迎えに必要なのである。兵庫県庁から、外資用に借りて来たこともあった。

黙雷や連城のあとにも、西本願寺からは何人かの外国留学生を出したが、外人が訪ねて来たとき、まともに通訳できるのは赤松連城だけであった。彼はロンドンに二年間いたきりだが、語学の才は抜群で、英語で道を講じ、法を説くことのできた最初の僧であった。

これらハイカラ僧侶たちに対する風当りも強かった。昔

氣質の保守派たちは、じろじろと相手の髭をのぞきこんで、「おそれ多いことながら、歴代御法主の御影の中に、髭をたくわえられた御相好があると思うかね」

と、いやみをいった。島地黙雷など、大事の美髯を剃り落したり、また思い直して生やしたりした。

明如はこれら革新派を支持して、思う存分やらせるほうだったけれど、彼自身は一代のうち洋服を着たことはなかった。

明如が欧化に熱心だったのは、キリスト教の進出に脅威を感じたからであった。そのころ京都では、新島襄の同志社が青年のあこがれの的になっていた。明治八年十一月、新島が寺町通丸太町上る松蔭町の仮校舎で開校式をあげたとき、生徒はわずか八名だったが、一年後には二棟の校舎と付属食堂を新築するほどに発展していた。それに対して本願寺は全国に信徒七百万を持つといふものの、寺へ詣りに来る者は田舎の老爺や老婆ばかりで、若い世代からは問題にされなかった。明如は、

「仏教も田舎のじじいやばあばかり相手にしてはいけない。彼等が死んでしまったら、寺へ来る者がなくなるだろう」

といって、新時代に呼びかける方法を研究した。僧侶に

洋服を着用させたり、大教校の校舎をペンキ塗りの洋館にしたりしたのも、仏教につきまとうカビ臭い陰湿な印象を払い去る意図から出たものといってよかった。

明如は同志社に対抗する新しい学校の創立を計画した。もともと西本願寺には大教校があるが、これは専門の仏教学を考究するところで、社会的活動をしたり、思想運動をしたりするところではない。学生もまた、僧籍にある者にかぎられている。むしろ、学問的水準は高くななくても、僧俗の別にとらわれず、優秀な人材を全国から集めて、仏教宣布の第一線に立たせるように教育しようというのである。こうして明治十八年、普通教校は七条猪熊^{いのしし}に開校となった。課程は下等科三年、上等科三年とし、内学、漢学、英学、教学の諸科を教授する定めである。

開校の翌年、この学校にストライキが起った。生徒の要求は次の四点である。

一、器械体操を廃して、歩兵操練科を設置されたい。

二、服制を定めて、洋服を制服とされたい。

三、日本人教師の英語では不十分であるから、外人教師を雇い入れられたい。

四、寄宿舎の食事を改善して、毎朝食に鶏卵を一個ずつつけてほしい。

一の器械体操のかわりに歩兵操練科という要求は、今日からいえば、軍国主義への志向ということになるが、明治十年代の日本では、むしろ西洋の近代国家への漠然としたあこがれから出たものといっているであらう。全国どの学校でもやっていないが、むしろ先頭を切ってやるのが、普通教校のハイカラ精神であらう。

二の制服の問題も、西洋風のものへのあこがれといっているだろう。この学校の生徒は、僧俗ほぼ半数ずつだった。宗門の経営であるため、僧服を着るのが習慣となっていた。俗人出身の学生たちが、これをいやがって、洋服を着たため、退学を命ぜられたこともあった。この要求はその不合理へ向けられたものだった。

三の要求はおそらく実際上の必要から出たものであらう。現に同じ京都市内で、対立的立場にある同志社の生徒が、アメリカ人の宣教師などと日常の会話を自由に取交しているとき、日本人教師のぎこちない英語の授業を受けることは、間拔けてみえたにちがいない。

四の要求は、反対する筋合いのものではない。

こうして生徒の要求は全部いれられたが、首謀者と目された四十数名は退学を命ぜられた。

首謀者の筆頭に署名したのは小林洵（小林はのちに高楠

順次郎と改名、日本仏教学界の第一人者になり、大正大蔵経を新しく編集した）という学生であった。彼はこのストライキにそれほど熱心ではなかったのだが、生徒の間に人望があったので、代表格で最初に署名させられたのであった。

退学を命ぜられた学生は、意地になって同志社へ移ったり、東京へ出てべつの学校を志望したりしたが、小林は貧しいので行くところがない。寄宿舎でごろごろしているとある日、回状がまわって来た。十一歳になられる光瑞新門がこのたび東京の学習院へ御入学のため、明日旅立たれるから、学生一同は七条のステーションまでお見送りに出るようにというのである。小林はもう普通教校の学生ではないから、見送りに出る義務はないのだが、寄宿生がみな出かけるというのに、ひとり部屋でボツンとしていてもしょうがない。新門の出版を見物してやろうと思って、和服のふだん着のまま、駅まで出かけた。すると、在校生はみな整列して見送っているが、小林はそこに入る資格はないから、ひとりはなれたところに立っていた。新門の一行が目の前へ近づいたとき、まさかじろじろ見ているわけにもゆかないので、これまでの習慣で、頭だけ下げた。

あくる日、本山の有力者の一人が学校へどなりこんで来

た。

「あれほど嚴重な達しをしたのに、在校生の半数もお見送りに出なかったのは、どうしたことか？ 学校当局の怠慢ではないか。しかも、過目のストライキで退学処分を受けた生徒が殊勝にもひとりでお見送りに出ていた。あのような感心な生徒を処分し、一方では在校生を思う通りに動かすことができないとは、当事者の頭が狂っているのではないか」

学校ではあわてて小林たちの退学処分を取消し、その復校を許した。小林はこうして勉学を続け、のちの高楠順次郎となることができたわけである。

学生たちのストライキによって、普通教校の生徒はみな洋服を着るようになり、教練の時間には、武装して銃をかつぎ、ラッパを先頭に、行進したので、学生の教練をはじめて見る京都の人たちは、この学校を六条鎮台と呼ぶようになった。明如はまたスポーツにも力をいれて、琵琶湖で学生のボートレース大会をやるときは、御座船に本願寺の定紋を打った幔幕を張らせて乗り込み、機嫌よく観戦した。明如は、自分では一生洋服を着たことがなかったが、若い者が新しいことをやるのは嫌いではなく、むしろ奨励したのであった。だからこそ、普通教校のストライキも、学

生側の要求を全部受け入れておさまったので、明如が反対だったら簡単にすむものではなかった。もともと普通教校は、因襲に閉された宗門の中へ、外界の新鮮な空気を吹き込むために作られた学校であり、その生徒たちは、いわば明如の子飼いの連中なので、彼等のすこしくらいの我儘は聞いてやりたいというのが、彼の本心であった。そして、彼等の中から、高楠順次郎のほか、後年評論家として活躍した古川老川、高嶋米峰、杉村楚人冠などが出た。

光瑞が学習院入学のため京都を発したのは、明治十九年の二月六日だった。随行は水原了阿、上原芳太郎のほか、身辺の世話をやく上田のぶという女であった。なお、顯証寺の連枝尊定が、光瑞の学事相手を兼ね、東京留学を命ぜられて、先発していた。

その日は石場の遠帆楼に一泊し、翌日、見送りの老女その他と別れ、琵琶湖を渡って、高宮の円照寺に一泊し、吹雪の中を長浜までたどりついたところ、にわかの高熱を発したので、いそいで高宮まで引返した。そこで漢方の老医を呼んで、診察を乞うたところ、

「当分旅行はなさらぬがよろしいでしょう」
という忠告である。

そのまま、円照寺に留まって療養し、月末ころ快方に向つたが、なにしろ少年のことで、このまま長い旅行を続けるわけにゆかない。一旦京都へ帰って静養し、すっかり元氣になったところで東京へ向かうということになった。

しかし、京都へ帰っても、本山へ入るわけにはゆかない。つい先日、盛大な見送りを受けて出発したばかりである。

病氣で帰って来たといえ、大騒ぎになって、見舞いが絶えないだろうし、もう一度出発というときは、またまた盛大な見送りということにもなろう。そういう煩わしさを避けるため、彼は本山へ入らず、伏見桃山の三夜荘という別邸に入り、世間へは秘密で静養することになった。本山からは父明如や弟妹たちが訪ねて来るが、彼の方から本山へゆくことはなかった。

三夜荘は桃山の麓、宇治川にのぞんだ小丘の上に建つ別荘で、もと伏見稻荷の勅使館であったが、これより十年ばかり前、明如が強度の神経衰弱にかかり、医師からどこか静かなところで療養するようにとすすめられて、その場所にと買い求めたものであった。ここは閑静な上に、景色がいいので、来客の接待用にも使われ、英照皇太后、照憲皇太后、伊藤博文、山県有朋、西園寺公望などが上洛したときは、ここに泊ったこともあった。

三夜荘に在るうちに、光瑞の健康は回復したので、五月十九日、前回の上原芳太郎、上田のぶのほか、新しく安藤竜曉に付添われ、与三と岩次郎という二人の車夫に二人乗りの人力車を曳かせて、東京へ向つた。

途中あちこちを見物しながら、ゆるゆると旅をしたので、東京へ着いたのは、十六日後の六月三日だった。

東京では、築地の本願寺に住んで、神田錦町の学習院へかよつた。学習院は幕末のころ、宮家や公家の子弟の教育のため、京都に設立されたものだが、維新のどさくさでは勤王諸藩の志士の集会所となり、明治になると一時閉鎖されていたところ、明治十年から再建されたものであった。光瑞が入学したときの院長は、戊辰戦争で五稜廓に立てこもつた大島圭介であった。

ところで、光瑞は明治二十三年、学習院を中途退学した。退学の理由について、くわしい説明はないが、ただ本願寺の記録によると、当時の学習院は軍事偏重で、教練を強制し、殺伐の氣がみなぎっていたので、宗門の主となるべき人を教育するにふさわしくないという老臣たちの判断で、退学に決定したということになっている。

しかし、ほぼ同じころ、京都の本願寺のお膝元の普通教校では、学生に軍事教練をさせている。明如がかならずし

も教練を嫌っていなかったことはあきらかである。してみると、学習院の殺伐な空気を新門の教育にふさわしくないと判断したのは、門主をさし置いた老臣の独断だったのか。それとも、明如自身も、軍事教練は普通教生にはふさわしくても、本願寺の法嗣にはふさわしくないと考えたものか。

一説には、光瑞自身が学習院の軍事偏重の空気にあきたらず、わざわざ京都まで帰り、みずから明如に訴えて、退学にきめたといわれている。光瑞は自分自身の意見に従って行動する人だったから、まだ十四、五の少年とはいえ、それもあり得ることだった。これが真相かも知れない。

学習院を退学した光瑞は共立学舎へ入学した。この学校は英学者の尺振八が設立した英学校で、大学入学の予備校のような性質のものであったが、光瑞はまもなくこも退学して、京都へ帰った。この退学の理由もはっきりしないが、想像をたくましくすれば、全国から種々雑多な青年が集まって、勤勉な学生もいれば、のらくら学生もあり、蓬頭垢面の苦学生や蜜カラ学生もいるという、紛然雜然とした学校の空気は、生まれながらにして貴族として育てられた彼にとって、とうてい融けこんでゆけるものではなかったということではあるまいか。

十月、京都へ帰ることに決定した光瑞は、暇乞いのため、二条公爵家、青山御所、毛利公爵家、三条公爵家、柳原伯爵家、九条公爵家などを訪ねた。青山御所では皇太后から茶菓酒肴を賜わった。これが彼の日常の生活圏である。共立学舎で蜜カラ書生や苦学生と机をならべる人ではない。

京都へ帰った光瑞は、まだようやく十五歳の少年である。もっと和漢洋の学問と教養を身につけねばならない。父明如の指示で、洛北吉田神社の近辺の、茅ぶきの民家を借りて、勉学生活を送ることになる。身辺の雑事には、近習二人と下僕一人が奉仕し、内外の古典や宗典、書道、歌道の師は、時間をきめて交代でかよって来た。

半年ばかりしたある日、明如は昵近のひとりと呼ぶと、「北は若王子、永観堂から、南は大仏、今熊野あたりまでのうちに、家を一軒探して来るように。三日の暇を与えるから、その間に……」

と命じた。

「急な仰せで、うまく探せるかどうかわかりませぬが、できるだけ努力いたします。しかし、どうしてまた、急にそのようなことを？」

「さればさ、新門の学問所を、本山へ近いところに移したいのだ。新門にはもっと勉強を積ませねばならぬが、わた